天台大師における『法華玄義』「行妙」の形成

村上明也

問題の所在

天台大師智顗（五三八―五九七）が開皇十三年（五九三）に講説した『法華玄義』には、開皇十四年（五九四）講説の『摩訶止観』や開皇十五年（五九五）撰述の『四教義』、また嘉祥大師吉蔵（五四九―六二三）の『法華玄論』などが大いに参照され、本疏は門人章安灌頂（五六一―六三二）の私見も相当加わって、智顗滅後の開皇十七年（五九七）から仁寿二年（六〇二）の間に現行形態が整ったと考えられている。①

その中でも智顗親撰②『四教義』及び吉蔵撰『法華玄論』の二書が『法華玄義』に与えた本文的影響は強く、目下指摘されているだけでも、『法華玄義』巻第二上「釈名」章の「相待・絶待の二妙」の名目、巻第七下「釈名」章の「釈蓮華」の「引旧解」や「出経論」、巻第八上「弁体」章の「出旧解」、巻第九下「明宗」章の「簡宗体」に列ねられる十二師の異説、巻第十下の「記者私録」などは『法華玄論』の文とよく一致し、③さらに『四教義』の文は『法華玄義』巻第四下から巻第五下に説かれる迹門十妙中の「位妙」の大半を占めるほどである。④すなわち、『法華玄義』は智顗講説当初の筆録書ではなく、智顗の講説を灌頂が右に列挙した文献など⑤を援用して完成させたものであるため、本疏のすべてを智顗真説と考えることはできず、佐藤哲英博士が述べられるように『法華玄義』に対する本文批判は、今後一層行われねばならない。⑥

ここで注目したいのは、『法華玄義』巻第三下から巻第四下に跨って説かれる「行妙」についてである。「行妙」とは、五重各説「釈名」の「妙」を通釈と別釈とに分ける中、別釈にて示される迹門十妙の第三を指し、当箇所は主に「通途の増数行」、「約教の増数行」、「五数に約して行妙を明かす」によって構成される。また「五数に約して行妙を明かす」における別円二教の『涅槃経』「五行」解釈は、天台大師独自の思想と謳われ、『法華玄義』の中でも特に注目されてきた重要な部分である。(7)

これまで全く指摘されてこなかったが、『法華玄義』の「行妙」段を詳しく検討してみると、別教「五行」解釈は、『四教義』巻第九から巻第十に論じられる別教行位の文を参照していることが分かってきた。さらに、円教「五行」解釈は、別教「五行」解釈の形成に深く関わった智顗最晩年の親撰書『四教義』に全く触れられない学説であることから、当箇所が天台大師の講説であるか否かの問題をも考証せねばならなくなってきたのである。したがって、本稿では智顗真撰『法華玄義』及び智顗親撰『四教義』における別教「五行」解釈を比較対照し、併せて円教「五行」解釈が智顗の真説であったかどうかを検討したい。

一　『法華玄義』「位妙」と『四教義』との本文的関連

「問題の所在」でも述べたように、開皇十三年（五九三）に講説されたはずの『法華玄義』の巻第四下から巻第五下に論じられる迹門十妙の第四「位妙」には、智顗が晋王広の懇請によって開皇十五年（五九五）に自ら撰述した『四教義』が六十六箇所にわたって援用されているとの報告例があり、(8)灌頂は『法華玄義』を編集整理する際、智顗親撰の『四教義』を有力な指南書としていたようである。

すなわち「位妙」では、『法華経』巻第三「薬草喩品」の文を参考にして、(9)人天乗を「小草位」、二乗を「中草

位」、三蔵菩薩を「上草位」、通教を「小樹位」、別教を「大樹位」、円教を「最実位」の計六位に割り当てているが、「小草位」以外の五位は、以下の如く『四教義』の文によって本文を構成している。煩瑣となるのを承知して、『法華玄義』の「中草位」「上草位」「小樹位」「大樹位」「最実位」と『四教義』との比較を一部示してみたい。

［中草位］

『法華玄義』巻第四下⑩

七聖位者、一隨信行、二隨法行、三信解、四見得、五身證、六時解脱羅漢、七不時解脱羅漢。通名聖者正也。苦忍明發、捨凡性入聖性、真智見理故、名聖人。一隨信行位者、是鈍根人入見道之名也。非自智力、憑他生解。是人在方便道、先雖有信、以未習真、信不名行。行以進趣為義。從得苦忍真明、十五刹那進趣見真故、名隨信行位也。

『四教義』巻第六⑪

二明七聖位者、一隨信行、二隨法行、三信解、四見得、五身證、六時解脱羅漢、七不時解脱羅漢。此七位通名聖者、以正為義。即練道懸鏡也。苦忍真明捨凡夫性、得入聖人性、真智見理、斷於同類之礙、故名為聖。此七聖人復有二種不同。謂學無學。前五種聖人悉是學人。後二種聖人是無學位也。……中略……一明隨信行位者、即是鈍根人入見道之名也。所言鈍根者、非自智薫、憑他生解名為鈍也。是人在方便道、先雖有信、已未發真、不名為行。行以進趣為義。從得苦忍真明、十五刹那進趣見真、名隨信行。故説但有近行人無遠行人。

［上草位］

『法華玄義』巻第四下⑫

上草位者、即是三藏菩薩位也。此菩薩從

『四教義』巻第七⑬

第三約三藏教明菩薩位以釋淨無垢稱義者、三藏教詮因緣生滅之理。

初發菩提心、起慈悲誓願觀察四諦、以道諦為初門、行六波羅蜜。從初釋迦至爾那尸棄佛時、名第一阿僧祇劫。常離女人身、亦不自知當作佛不作佛。準望二乘位、應在五停心別相總相念處位中。以慈悲心行六度行也。從爾那尸棄佛至然燈佛時、名第二阿僧祇劫。爾時雖自知作佛、而口不說。準望此位、應在煖法位中。即是性地順忍初心之位。既有證法之信、必知作佛。而用煖解、修行六度、心未分明故口不向他說也。從然燈佛至毘婆尸佛時、名第三阿僧祇劫。是時内心了了自知作佛、口自發言無所畏難。準此位、應在頂法位中。修行六度、四諦解明、如登山頂了見四方。故口向他說也。若過三僧祇劫種三十二相業者、準此是下忍之位。用此忍智行六度成百福德。用百福成一相因。於下忍之位、人中佛出世時得種也。若坐道場時、位在中忍上忍。從上忍一刹那入真、三十四心……中略……一發菩提心者、……中略……若緣愛見二種衆生、生滅四諦而起慈悲四弘誓願者、……中略……故大智度論云、初發心以為天人師。勝出一切聲聞緣覺。二行菩薩道者、即是三阿僧祇劫行六度也。從過去釋迦牟尼佛至爾那尸棄佛時、名一阿僧祇劫。從此常離女人身。爾時不自知我當作佛不作佛。此初阿僧祇劫。即是得五停心別想總想念處之位。用性念處共念處緣念處、行六度也。……中略……次明從爾那尸棄佛至燃燈佛、為第二阿僧祇劫。是時菩薩用七莖青蓮華、供養燃燈佛、敷鹿皮衣布髮掩泥、時燃燈佛便授其記。汝當來世必得作佛。名釋迦牟尼。爾時菩薩雖能自知我必作佛。而口不稱我當作佛。謂此是用煖法智慧修六度也。所以者何。因總想四念處、初得善有漏五陰。即是性地順忍初心之位。既有證法之信、故必知作佛。而用煖解修行六度、心未分明故不向他說。次明從燃燈佛至毘婆尸佛、為第三阿僧祇劫滿。是時菩薩内心了了自知作佛、口自發言無所畏難。我於來世當得作佛。今謂此是頂法之位、行六波羅蜜四諦觀解分明。如登山頂四方顧分明。了了自知作佛亦向他人說也。三明過三阿僧祇劫、種三十二相業。今謂此是入下忍之位。用此忍智修行六度成百福德。用百福德成一相。以為三十二相之業因也。種三十二相業因、於下忍之位、修六波羅蜜成百福之相。以為三十二相業因也。是三十二相於欲界閻浮提人中、受男子身。佛出世時緣佛身相故得種也。……中略……六成道相者、魔衆散已攝心端坐。

斷結、得阿耨三菩提、則名為佛。爾前則是三藏菩薩上草之位也。

於第四禪住中忍、修觀成中忍一剎那、上忍一剎那、世第一法一剎那、發真無漏。三十四心得阿耨多羅三藐三菩提。三十四心者、八忍、八智、九無礙、九解脱也。具足佛十力、四無所畏、十八不共法、三達無礙、三意止、大悲、四無礙智、一切諸法總想別想悉知。故名為佛。……中略……是為聲聞經中説大乘之位。

［小樹位］

『法華玄義』巻第四下⑭

十佛地者、大功德力資智慧、一念相應慧觀真諦究竟、習亦究竟。如劫火燒木無復炭灰、如象渡河到於邊底。雖菩薩佛名異二乘、通俱觀無生體法。同是無學。得二涅槃、共歸灰斷。證果處一故稱為通也。

『四教義』巻第八⑮

十佛地者、大功德力資智慧、一念相應慧觀真諦、習氣究竟盡也。故智度論云、聲聞智慧力弱、如小火燒木。雖燃猶有炭在、縁覺智慧力勝、如大火燒木木燃炭盡餘有灰在。諸佛智慧力大如劫燒火。大灰炭俱盡。亦如兔馬象三獸渡河之喩也。問曰、菩薩佛地名異、二乘何得言通也。答曰、名雖有異同是無學應供。得二涅槃、共歸灰斷。證果是一名義不殊。是則名義究竟俱同也。

［大樹位］

『法華玄義』巻第四下⑯

既有如此無量階差、是故經論名數、斷伏高下、對諸法門、多有不同。若華嚴、明四十一地。謂三十心十地佛地。瓔珞明五十二位。仁王明五十一位。新金光明經但出十地佛果。勝天王般若明十四忍。

『四教義』巻第九⑰

但諸經明此別位名數。多少斷伏高下、對諸法門、多有不同者、即為三。一者位數不同、二斷伏高下不同、三對諸法門不同。一位數多少有不同者、如華嚴經明三十心十地佛地有四十一地。瓔珞經明五十二位。仁王經明五十一位。新翻金光明經但出十

大品但明十地。涅槃明五行十功德。約義配位、似開三十心十地佛地。而文不出名。又十地論、攝大乘論、地持論、十住毘婆沙論、大智度論、並釋菩薩地位。而多少出沒不同云云。

［最実位］

『法華玄義』巻第五上⑱

此位經經出之不同。華嚴法慧菩薩、答正念天子、明菩薩觀十種梵行空、學十種智力入初住。十種梵行空即一實諦。亦無作之滅諦。學十種智力即觀無作之道諦。即十信位也。若大品云、譬如入海先見平相。亦是乘從三界中出也。仁王般若、普賢觀如前引。下文入如來室座衣等、即是修四安樂行。行處近處。涅槃云、復有一行是如來行所謂大乘。大論云、菩薩從初發心、即觀涅槃行道。若觀涅槃行道、生相似解、即是一行如來行也　云云。

地佛果。勝天王般若大品經等亦但明十地佛地。不辨三十心等覺地也。涅槃經明五行十功德。約義配位、似開三十心十地佛地。而文不出名。又十地論、攝大乘論、地持論、十住毘婆沙論、大智論、並釋菩薩地位。如此等諸經論明諸菩薩位名數多少不同。

『四教義』巻第十一⑲

四明經說不同者、如華嚴經法慧菩薩、答正念天子、明菩薩觀十種梵行空。學十種智力入初住位。即是此教十信位也。所以者何。觀十種梵行空即是觀一實諦。學十種智力即是觀無作四諦。此經即是方等之教。明即大涅槃即菩提相。若止若觀生相似解。即是瓔珞經明十信。大品經云、是乘從三界出也。十法成乘如前三觀中說。初出三界即十信也。又大品經云、譬如入海先一見平相。即是仁王般若明。十善菩薩發大心、長別三界苦輪海。法華經明入如來室著如來衣坐如來座。此即是修四安樂行。行處近處得六根清淨、住十信位。普賢觀經明修大乘人未得無生忍。前有十種證相、此即是十信之位。涅槃經云、復有一行是如來行所謂大乘大般涅槃。如大智度論云。菩薩從初發心、即觀涅槃行道。若觀涅槃行道、生相似解、即是一行。是如來行也。

なるほど佐藤博士の研究にある通り、『法華玄義』「位妙」は、『四教義』の本文を参考として書き上げられていることがわかる。しかし、右の対照表を紹介して『法華玄義』「位妙」と『四教義』の本文的関連を指摘したのなら、それは先行する研究成果を焼き直しただけになってしまう。そこで、筆者が今注目したいのは、別教「大樹位」における以下の本文対照である。

『法華玄義』巻第四下[20]	『四教義』巻第九[21]
三約涅槃明聖行合位者、初戒聖行定聖行、即是十信位也。生滅無生滅四真諦慧聖行、即是十住位。無量四聖諦慧、即是十行位。修一實諦無作四聖諦、即是十迴向位。次若發真見一實諦、證無作四聖諦、即是聖行滿住無畏地、得二十五三昧、能破二十五有。名歡喜地。五行具足。次後説十功德者、恐表住大涅槃十地之功德也。過此明佛眼了了是妙覺地也。三別解七位餘本尋。大樹位竟也。	三約涅槃經明五行合位者、初戒聖行定聖行、生滅四諦慧聖行即是十信位。次無生四真諦聖行、即是十住位。次無量四聖諦、即是十行位。次明修一實諦無作四聖諦、即是十迴向位。次若發真見一實諦、證無作四聖諦、即是聖行滿位。無畏地得二十五三昧、能破二十五有。名歡喜地。五行具足。而説十功德者、恐此表住大涅槃十地之功德也。過此明住大涅槃、即是妙覺地也。

すなわち、『法華玄義』は別教「大樹位」を締め括るに当たり、『涅槃経』所説の菩薩が実践する五種類の行法、所謂る聖行、梵行、天行、嬰児行、病行という「五行」の立場から十信、十住、十行、十廻向、十地、等覚、妙覚との関係を述べ、最後に七位を個別的解釈することについては、対照表上段の文字囲の「余本」に詳説を譲っ

ている。

この「余本」とは、天台第六祖荊渓湛然（七一一―七八二）の『法華玄義釈籤』に「應下二往キテ四教本ノ中一尋ヌ上一」[22]とあるので、智顗が最晩年に著した『四教義』とみて間違いないが、この『法華玄義』が譲った『四教義』の箇所にこそ、これまで指摘されてこなかった迹門十妙の第三「行妙」と本文的一致を見せることとなるのである。

二　『法華玄義』「行妙」と『四教義』との本文的関連

そもそも『四教義』は、別教行位を①「経論出ス二別教菩薩ノ位ノ不同ヲ一」[23]、②「総シテ明ス二別教行位ヲ一」[24]、③「歴別解釈ス」[25]、④「約シテ二別教位一ニ釈ス二浄無垢称位ヲ一」[26]の四意によって明らかにしており、『法華玄義』の別教「大樹位」に参照される『四教義』の箇所は①及び②の途中までである。そして『法華玄義』「行妙」段は、『四教義』の③「歴別解釈」と大いに本文上の一致が確認されてきたので、以下にまず別教「五行」解釈の第一「聖行」を両書によって対比させてみたい。

『法華玄義』巻第三下[27]

又更發願。願一切衆生得護持禁戒、得清淨戒、善戒、不缺戒、不析戒、大乘戒、不退戒、隨順戒、畢竟戒、具足諸波羅蜜戒。以此十願防護衆生。菩薩一持戒心、若干願行以莊嚴戒。諸餘行心亦應如是。

『四教義』巻第九[28]

又復護持性重戒、息世譏嫌戒等無差別。如是持戒施與一切衆生。願一切衆生令得禁戒、善清淨戒、善戒、不缺戒、不折戒、大乘戒、不退戒、隨順戒、畢竟戒、具足成就諸波羅蜜戒。

ここは「聖行」を戒定慧の三学に分ける「戒聖行」の箇所である。二書とも『涅槃経』巻第十一「聖行品」所説の護持禁戒、清浄戒、善戒、不欠戒、不析戒、大乗戒、不退戒、随順戒、畢竟戒、具足成就波羅蜜戒の十戒を挙げるため[29]、この本文自体は智顗独自の文章とはいえないものの、『四教義』が第十「具足成就諸波羅蜜戒」と呼んでいるのを、現行の『法華玄義』は「具足諸波羅蜜戒」と略称していることがわかる。

次に『法華玄義』及び『四教義』における「定聖行」の箇所を見てみよう。

『法華玄義』巻第四上[30]

八背捨名 云云。……中略……次除卻皮肉。諦觀白骨、見骨色相異。謂青黄白鴿。如是骨相亦復無我。得此觀時、名欲界定。次觀骨青時、見此大地東西南北悉皆青相。黄白鴿色亦復如是。此是未到之相。又觀骨人眉間出光、光中見佛、是初背捨成相。如是次第乃至八背捨發相、具如禪門 云云。

『四教義』巻第九[31]

又修八背捨觀禪。觀身内外不淨、除卻皮肉。諦觀白骨、見骨色相異。所謂青黄白色鴿色。如是骨相亦復無我。得觀禪欲界之定。菩薩爾時次第觀骨。觀青骨時、見此大地東西南北悉皆青相。黄白鴿色亦復如是。此即是得觀禪未到地定成也。又云、作是觀時、眉間則出青黄赤白鴿等色光、光中見佛、是為初背捨。乃至成就八背捨。

八背捨の白骨観を論じる箇所においても、『法華玄義』は『四教義』の本文とよく一致を見せている。ただし、『法華玄義』の文末には「具さには禅門の如し」と述べて、智顗前期時代を代表する著作『次第禅門』にその詳説を譲っているが、対照表を一見しても明らかなように、『法華玄義』は『四教義』の文をそのまま転用しているだけに過ぎず、その後『次第禅門』の書名が記されることは、潅頂の編集作業の一端を窺う上で十分注目され

てよい。

そればかりか、『法華玄義』における「聖行」以外の「梵行」「天行」「嬰児行」「病行」を『四教義』と比較してみても、次の如く『四教義』とほぼ全文一致することが分かってきた。

『法華玄義』巻第四上[32]

二梵行者、梵者淨也。無二邊愛見證得、名之為淨。以此淨法與拔衆生。即是無緣慈悲喜捨也。菩薩以大涅槃心修於聖行、得無畏地、具二十五三昧無方大用。爾時慈悲是真梵行。非餘梵天所修四無量心、亦非三藏通教衆生緣法緣等慈悲也。以今慈悲喜捨熏修衆行、無不成辦。大經云、若有人問、誰是一切諸善根本、當言慈是。慈既是行本故言梵行。若依圓語亦如大經。慈即如來、慈即佛性。慈若不具佛十力四無所畏三十二相者、是聲聞慈。若具足者是如來慈。是慈即是大法聚、是慈即是大涅槃。慈力弘深具一切福德莊嚴、故名梵行。

『法華玄義』巻第四上[34]

三天行者、第一義天。天然之理、此語道前。由理成行、此語道中。由行理顯、此語道後。今約由理成行、

『四教義』巻第十[33]

二明梵行者、即是無緣慈悲喜捨。菩薩以大涅槃心修於聖行得無畏地、有二十五三昧無方大用。爾時慈悲是真梵行。非餘梵天所修四無量心、亦非三藏教通教等衆生緣法緣之慈悲也。菩薩爾時以此慈悲無緣無念、薰修衆生行、無不成辨。此之梵行即是一切法。故涅槃經云、慈即如來、悲即佛性。慈若不具足佛十力三十二相四無畏者、非如來慈故。智力弘深能具足一切福德、以自莊嚴名梵行也。

『四教義』巻第十[35]

三明天行者、即是中道第一義天。天然之理、籍行顯理因理成行、故名理為天行。菩薩雖入初地、初地不應住。以有所

故言天行。菩薩雖入初地、初地不應住。以有所得故。修上十地慧十重發真修慧。由理成行名為天行。天行即智慧莊嚴。上求佛道故、有聖行天行。下化衆生故、有梵行病行嬰兒行也。

『法華玄義』巻第四上[36]

四嬰兒行者、若福慧轉增、實相彌顯。雖不作意利益衆生、任運能有冥顯兩益。天行力有冥益、梵行力有顯益。衆生雖有小善之機、無菩薩開發不得生長。慈善根力如磁石吸鐵。和光利行、能令衆生得見菩薩同其始學。漸修五戒十善人天果報楊葉之行。又示二百五十戒。觀練熏修、四諦、十二因緣、三十七品、同二乘嬰兒行。又示同習六度三阿僧祇百劫種相好、柔伏煩惱六度菩薩小善之行。又示同即色是空無生無滅。通教小善之行。又示同別教歷別次第相似中道小善之行。皆是慈心之力、俯同群小提、引成就。從慈心與樂起嬰兒行。

『法華玄義』巻第四上[38]

五病行者、此從無緣大悲起。若始生小善必有病行。今同生善邊名嬰兒行、同煩惱邊名為病行。以衆生病得故。又應修上地智慧十重發真修慧。契理顯理成行、名為天行。天行即是智慧莊嚴。梵行即福德莊嚴。上求佛道。是故有聖行天行。下化衆生即有梵行病行嬰兒行也。

『四教義』巻第十[37]

四嬰兒行者、若菩薩福德智慧轉增。是則實相彌顯。雖不作意利益衆生、任運能有冥顯兩益。以天行之力則有冥益、以梵行之力則有顯益。衆生應有小善之機、無菩薩開發不能生長。以慈善根力、如磁石吸鐵。和光利行、能令衆生得見菩薩同其始學。漸修五戒十善人天果報三十三天楊葉之行。又示二百五十戒。觀練薰修禪、四諦、十二因緣、三十七道品、同二乘嬰兒行。又示同修六度百劫種相好、柔伏煩惱六度菩薩小善之行。又示同即色是空無生無滅。通教小善之行。又示同別教歷別次第相似中道小善之行。皆是慈心之力。俯同群品提、接成就。從心與樂起嬰兒行。

『四教義』巻第十[39]

五病行者、此行從無緣大悲起。若生小善必有病行。今當分別同生善邊名嬰兒行、同煩惱邊名為病行。病行從大悲生衆

則大悲熏心。是故我病。或遊戯地獄、或作畜生形、化身作餓鬼等、悉是同悪業病。如調達等。又示有父母妻子金鏘馬麥寒風索衣熱病求乳、此示人天有結業、生老病死之病。又示道場三十四心斷結、示同二乗見思之病。方便附近語令勤作。三藏通教菩薩亦如是。又同別教寂滅道場初斷塵沙無明之病。是故菩薩悉同彼病、遍於法界利益衆生。次第五行竟。

生病。是故我病。大悲熏心遊戯地獄、同衆生悪業之病。如調達在地獄。如三禪樂。乃至畜生餓鬼脩羅亦如是。又同人天有結業、生老病死之病。又同二乗有見思之病。方便附近語令勤作。三藏教通教菩薩亦如是。又同別教塵沙無明之病。是故菩薩還同彼病、遍於法界利益衆生。是為五行之相也。

このような本文的一致の結果、『法華玄義』第三「行妙」も第四「位妙」と同様、智顗親撰の『四教義』と大いに関連していることが明白となった。しかし、それは『法華玄義』の講説当初から別教における「五行」解釈が存したという論拠にはならず、むしろ本疏の編集者である潅頂が智顗親撰の『四教義』巻第九から巻第十に説かれる別教行位の③「歴別解釈」を参考にして迹門第三「行妙」を形成させたと考えるのが最も妥当な見解であろう。

以上、現行の『法華玄義』巻第三下から巻第四上に見られる別教「五行」解釈と『四教義』の別教「歴別解釈」を対照してきたが、次項では『法華玄義』における円教「五行」解釈に対して、些か検討を加えてみたい。

三　『法華玄義』の円教「五行」解釈は智顗真説か

円教「五行」解釈は周知の如く、『涅槃経』の「如来行」と『法華経』の「安楽行」を同一視し、聖行、梵行、

天行、嬰児行、病行の「五行」を主に『法華経』巻第四「法師品」[40]の如来の入室、著衣、坐座を述べる「弘経の三軌」などによって理解していくことである。すなわち、『涅槃経』巻第十一「聖行品」の「復タ有リ一行。是レ如來ノ行ナリ。」[41]という文に対して、『法華玄義』は以下のようにいっている。

> 此ノ經ニ明スト、安樂行ヲ者、安樂ヲ名ク涅槃ト。即チ是レ圓果ナリ。行ハ即チ圓因ナリ。與ニ涅槃ト一義同シキカ故ニ、稱ス如來ノ行ト。入室著衣坐座ヲ悉ク稱スルハ如來ト者、此レハ就レ人ニ為レス語ヲ。……中略……二經ノ義同シキナリ也。涅槃ニハ列ネテ一行ノ名ヲ、而廣ク解ス次第ノ五行ヲ。法華ニハ標シテ安樂行ヲ、廣ク解ス圓意ヲ。今、依テ法華ニ、釋セハ圓ノ五行ヲ、五行ハ在リテ一心ノ中ニ、具足シテ無キヲレ缺クルコト名ク如來ノ行ト。（『大正蔵』三三・七二五中）

ここでは、『涅槃経』の「如来行」と『法華経』の「安楽行」に相違なきことを述べるものの、『涅槃経』は「一行」と名づけて次第の「五行」を説き、『法華経』は「安楽行」を立てて不次第（円）の意を明らかにするという。また、『法華経』によって円の「五行」を解釈すれば、聖行、梵行、天行、嬰児行、病行の「五行」はすべて一心の中に具足され、一行も欠けることのない様を「如来の行」と名づけている。

さて、現行の『法華玄義』には別教及び円教における『涅槃経』「五行」解釈が述べられているので、当然この両学説は天台大師による開皇十三年（五九三）の『法華玄義』講説時で既に語られていたと見なすべきであるのに、開皇十五年（五九五）に智顗自らが撰述した『四教義』に別教「五行」解釈しか説かれないのは、どのように理解すべきであろうか。言い換えれば、開皇十三年の時点で智顗に円教「五行」解釈を講説するだけの思想的な準備があったかどうかを確かめねばならないわけである。

そこで筆者は、円教「五行」解釈が『涅槃経』「如来行」と『法華経』「安楽行」や「弘経の三軌」を密接に結び付けるという思想内容に基づき、『法華玄義』以外の智顗親撰及び真撰の書を詳細に検討してみたところ、現行『摩訶止観』巻第三之下「偏円」の第四「明漸頓」には、以下のように述べられていた。

圓ノ觀ハ、正直ニ捨テテ方便ヲ、但タ説クト無上道ヲ、唯タ此ノ一事ノミ實ニシテ餘ノ二ハ則チ非スト真ニ、説クト最實ノ事ヲ。是レヲ名ク教ノ實ト。行ニスト如來ノ行ヲ、入リ如來ノ室ニ衣座等ト、復タ有リ一行。是レ如來ノ行ナリ。是レヲ名ク行ノ實ト。所レ見ル中道ハ即チ一究竟ナリ、同シニシテ於如來ノ所レ得ル法身ト無異無別ナリ。是レヲ名ニク證ノ實ト。（『大正蔵』四六・二三上）

すなわち、円教の止観が教行証全てにおいて実を明かす中、行実では『法華経』の「如来の入室、著衣、坐座」と『涅槃経』の「如来行」が並記されていたのである。

しかしながら、智顗が『法華玄義』講説の翌年（五九四）に荊州玉泉寺で講説した『摩訶止観』は、門人潅頂によって聴記本、整理本、修治本、再治本と次第に纏められ、現行『摩訶止観』は大業三年（六〇七）から貞観六年（六三二）までの間に現行形態が整ったと考えられている。[42] つまり、本書は、『法華玄義』と同様、智顗講説当初の筆録書ではなく、智顗の講説を門人の潅頂が再三再四にわたって修治添削したものであるため、本書のすべてを智顗真説と見なすことはできない。ところが、佐藤博士の研究によれば、智顗親撰『観心論』の注釈書である潅頂自撰『観心論疏』[43]には、智顗講説当初の聴記本に近い『摩訶止観』が長文で引用されていると考えられており、この『観心論疏』依用の『摩訶止観』「陰入界境」の「破法遍」には、『涅槃経』の「如来行」と『法華経』の「安楽行」「如来の入室、著衣、坐座」を密接に関連させて次のようにいっている。

又タ圓カニ觀ニ心スルハ十界ヲ者、佛界ハ即チ法身ノ徳ナリ。亦タ即チ如來ノ衣ナリ。二乘界ハ是レ第一義空ナリ。即チ般若ノ徳ナリ。亦タ即チ如來ノ座ナリ。菩薩界ハ即チ是レ解脱ノ徳ナリ。亦タ即チ如來ノ室ナリ。是レハ則チ三徳成ス大涅槃ヲ。名ケテ為スナリ安樂行ト。如來ノ衣座室ノ三ハ是レ如來ノ之圓行ナリ。此ノ行ハ是レ涅槃ノ行ナルカ故ニ名クナリ安樂行ト也。涅槃經ニ云ク、復タ有リ一行。是レ如來ノ行ナリト。斯ノ之謂レナリ也。故ニ知ヌ、圓カニ觀ニ心スルハ十界ヲ者、即チ是レ常ニ觀ニスト涅槃ノ行道ヲ、行スト如來ノ行ヲ。是レ安樂行ナリ也。然ラハ三徳ハ即チ三般若、三涅槃、乃至十種三法ナリ。圓カニ具スル十法界ヲ觀ハ中ナリ也。

（『大正蔵』四六・六一五中～下）

傍線部を見ると明らかなように、ここでは仏界、二乗界、菩薩界の三界に法身、般若、解脱の三徳と入室、著衣、坐座の三軌が数法的に配釈されており、如来の円行たる『法華経』の「安楽行」及び「弘経の三軌」が『涅槃経』巻第十一「聖行品」の「復タ有リ一行。是レ如来ノ行ナリ」と関連していることが知られる。

すなわち、現行の『摩訶止観』と『観心論疏』依用の『摩訶止観』には、共通して円行を『涅槃経』と『法華経』で立証していたので、説かれる段落に異なりはあっても、両書が同様の趣意を論じていることは、『摩訶止観』講説時に『法華経』「安楽行」「弘経の三軌」と『涅槃経』「如来行」を結び付ける思想があった一証左となろう。

また『涅槃経』と『法華経』との連関関係は、智顗が天台隠棲時代[44]（五七五―五八五）に述作したとされる[45]『天台小止観』（以下、『小止観』と略す）の最終項「証果」にも次のようにある。

若シ住スレバ此ノ観ニ、……中略……若シ自然ニ流ニ入スレバ薩婆若海ニ、即チ是レ行センニ如来ノ行ヲ。若シ行スレバ如来ノ行ヲ、即チ是レ入ランニ如来ノ室ニ。若シ入ラハ如来ノ室ニ、即チ是レ著センニ如来ノ衣ヲ。若シ著スレハ如来ノ衣ヲ、即チ是レ坐センニ如来ノ座ニ。若シ坐サハ如来ノ座ニ、即チ是レ以テ如来ノ荘厳ヲ而モ自ラ荘厳センヲ。

（関口真大『天台小止観の研究』（理想社、昭和二九年）「定本天台小止観」三六二）

ここでは、行者が「中道正観」によって「薩婆若海に流入す」「如来の行を行ず」「如来の室に入る」「如来の衣を著す」「如来の坐に座す」「如来の荘厳によって自らを荘厳する」などといった証果が列挙されている。

もっとも『小止観』が説く「中道正観」とは、『摩訶止観』における円融相即の不次第観ではなく、別教所談の隔歴次第の三観であり、本書は「禅」の一字で一切仏法を摂める『次第禅門』から「止観」によってそれを統摂する『摩訶止観』へと展開する過渡期的書物として位置付けられるものである。

ところが、『小止観』の三観思想が隔歴次第を述べるとはいえ、第十「証果」に「如来行」と「弘経の三軌」

とを同時に示していることは極めて興味深く、この学説を円融相即の不次第観へと発展させたのは、前掲の『観心論疏』『摩訶止観』の記述や次に紹介する『法華玄義』の円教「五行」解釈といえよう。

観心ノ圓ノ五行トハ者、上來ノ圓行ハ、不レ可カラ二遠求一ス。即シテ心ニ而モ是ナリ。一切諸法ノ中悉ク有リ二安樂ノ性一。即チ觀スルヲ心性ヲ一名ケテ為ス二上定一ト。心性ハ即空即假即中ナリ。五行三諦一切佛法ハ即シテ心ニ而モ具ス。初心ニ如ク此ノ行ス二如來ノ行ヲ一。

（『大正蔵』三三・七二六上）

すなわち、円の五行とは、対境として遠くに求めるものではなく、必ず自らの心に即して把捉せねばならず、心の本性とは即空即仮即中であるから、行者の心には五行・三諦・一切仏法が具足され、こうした如来の行を初心に行ずることこそ、観心の円の五行であると『法華玄義』は主張している。

以上、『法華玄義』の円教「五行」解釈の内容に基づきながら、親撰『小止観』、智顗講説当初の聴記本に近いとされる『摩訶止観』（『観心論疏』）、現行『摩訶止観』を詳しく検討してきたが、この三書は共通して『涅槃経』「如来行」と『法華経』「安楽行」及び「弘経の三軌」とを密接に連関させていたので、円行に関する議論は『法華玄義』の円教「五行」解釈だけでないことが分かってきた。したがって、天台大師に円教「五行」解釈を語るだけの思想的な準備はすでに開皇十三年（五九三）の『法華玄義』講説時に認められてよいのではなかろうか。

結　要

叙上の如く、筆者は『法華玄義』「行妙」段の別教・円教における『涅槃経』「五行」解釈に対して慎重な本文考証を試みてきたが、これまでの要点を箇条書きにすると次のようになる。

① 古来より智顗親撰『四教義』や吉蔵撰『法華玄論』が『法華玄義』に与えた影響は、すでに多くの先学によって指摘されてきたが、『法華玄義』巻第三下から巻第四下に説かれる迹門十妙の第三「行妙」段については、これを天台大師独自の学説として誰も疑いを差し挟むことはなかったのである。

② ところが、『法華玄義』の「行妙」段を詳しく検討してみると、別教における「五行」解釈は、『四教義』巻第九から巻第十に見られる別教「歴別解釈」を大いに参照していたので、潅頂は『法華玄義』の「行妙」段を筆録整理する際、『四教義』を有力な指南書としていることが判明してきた。

③ また、智顗最晩年の親撰『四教義』には、円教義による『涅槃経』「五行」解釈が一切見られないことや②における別教「五行」解釈の形成事情などを勘案すれば、『法華玄義』の円教「五行」解釈の智顗講説事実に関して再度検討せねばならなくなってきたのである。

④ すなわち、『法華玄義』の円教「五行」解釈は、主に『涅槃経』「如来行」を『法華経』「安楽行」及び「弘経の三軌」によって論じているが、その思想は天台隠棲時代（五七五―五八五）の親撰『小止観』、開皇十四年（五九四）講説の『摩訶止観』（『観心論疏』依用の『摩訶止観』をも含む）などにも見られるため、開皇十五年（五九五）に智顗自らが撰述した『四教義』に円教「五行」解釈が説かれないからといって、天台大師に円教「五行」解釈の講説がなかったと即断することはできない。

⑤ 無論、本稿は『法華玄義』における円教「五行」解釈の一部分を検討しただけで、「行妙」段の円教義全てに客観的な論拠を提示してきたわけではない。

⑥ しかしながら、予てより佐藤・平井両博士などによってなされてきた『法華玄義』の本文批判を考える時、本小論における『法華玄義』「行妙」段の検証は、今後無視することのできない極めて重要な問題となってくる。

⑦ したがって、こうした現前の事実に敢えて結論を下しておくならば、智顗滅後に『法華玄義』の現行形態を整えた潅頂は、別教「五行」解釈を『四教義』「歴別解釈」の文によって纏め上げているが、『涅槃経』「如来行」と『法華経』「安楽行」「弘経の三軌」を同一視する円教「五行」解釈の基本的な考え方は、智顗親撰『小止観』、『観心論疏』依用の『摩訶止観』、現行の『摩訶止観』などにも明かされるのだから、天台大師に『法華玄義』の円教「五行」解釈を講説する思想は十分にあったと考えるべきであろう。

註

① 佐藤哲英『天台大師の研究』第三篇「天台三大部の研究」第二章「法華玄義」（百華苑、昭和三六年、三〇二～三四〇頁）を参照

② 本稿では、佐藤哲英博士の研究に従って、智顗が直接筆を執ったものを親撰、智顗の講説を門人が筆録したものを真撰と厳密に区別して使用する。（佐藤哲英『天台大師の研究』、七三～七六頁）

③ 佐藤哲英『天台大師の研究』第三篇「天台三大部の研究」第二章「法華玄義」第六節「吉蔵の法華玄論との関連」（三一九～三二四頁）や平井俊栄『法華文句の成立に関する研究』第一篇「序論　智顗と吉蔵―経典註疏をめぐる諸問題」第三章「『法華玄義』と『法華玄論』」（春秋社、昭和六〇年、一〇一～一三九頁）を参照。なお、『法華玄義』巻第二上「釈名」章の「相待・絶待の二妙」の名目については、藤井教公「天台と三論の交流―潅頂の『法華玄義』修治と吉蔵『法華玄論』をめぐって―」（鎌田茂雄博士還暦記念論集『中国の仏教と文化』所収、大蔵出版、昭和六三年、一四一～一六五頁）、菅野博史『中国法華思想の研究』第三章「経題「妙法蓮華経」の解釈」第一節「妙の解釈」三「相待妙と絶待妙」（春秋社、平成六年、五四五～五五九頁）、花野充道「智顗の仏身論の素材の構造―『法華文句』の文献的価値について―」（『印度哲学仏教学』第十四号、平成十一年、二三一～二四五頁）でかなり詳しく述べられている。

④ 佐藤哲英『天台大師の研究』第三篇「天台三大部の研究」第二章「法華玄義」第八節「大本四教義との本文的関連」（三二六～三三〇頁）を参照

⑤ 『法華玄義』は、他にも『次第禅門』や散逸文献『四悉檀義』を参照していることも指摘されている。（佐藤哲英

『天台大師の研究』第三篇「天台三大部の研究」第二章「法華玄義」の第七節「次第禅門と止観の参照」（三二四～三二六頁）や第九節「法華玄義の成立過程」（三三一～三三七頁）を参照）

⑥ 佐藤哲英『天台大師の研究』三四〇頁を参照

⑦ 福島光哉「天台智顗の涅槃経五行の解釈」（『仏教学セミナー』第三三号、昭和五六年、一八～三三頁）や木本清史「『法華玄義』における涅槃経の五行」（『天台学報』第二五号、昭和五八年、一七一～一七四頁）を参照

⑧ 佐藤哲英『天台大師の研究』三二九頁を参照

⑨ 『大正蔵』九・二〇上～中

⑩ 『大正蔵』三三・七二八上～中

⑪ 『大正蔵』四六・七三九上～中

⑫ 『大正蔵』三三・七二九中～下

⑬ 『大正蔵』四六・七四三下～七四六中

⑭ 『大正蔵』三三・七三〇上

⑮ 『大正蔵』四六・七五〇中

⑯ 『大正蔵』三三・七三一下

⑰ 『大正蔵』四六・七五二上

⑱ 『大正蔵』三三・七三四上

⑲ 『大正蔵』四六・七六二下

⑳ 『大正蔵』三三・七三二中

㉑ 『大正蔵』四六・七五三上

㉒ 『大正蔵』三三・八八七上

㉓ 『大正蔵』四六・七五二上

㉔ 『大正蔵』四六・七五二上

㉕ 『大正蔵』四六・七五三上

㉖ 『大正蔵』四六・七六〇上

㉗『大正蔵』三三・七一七上～中
㉘『大正蔵』四六・七五三下
㉙『大正蔵』十二・六七五上
㉚『大正蔵』三三・七一九中～下
㉛『大正蔵』四六・七五三下～七五四上
㉜『大正蔵』三三・七二四上～中
㉝『大正蔵』四六・七五八中
㉞『大正蔵』三三・七二四中
㉟『大正蔵』四六・七五八中～下
㊱『大正蔵』三三・七二四中
㊲『大正蔵』四六・七五八下
㊳『大正蔵』三三・七二四下
㊴『大正蔵』四六・七五九上
㊵『大正蔵』九・三一下
㊶『大正蔵』十二・六七三中
㊷佐藤哲英『天台大師の研究』第三篇「天台三大部の研究」第四章「摩訶止観」（三六四～四〇〇頁）を参照
㊸『観心論疏』の撰述年は不明であるが、本疏は仁寿二年（六〇二年）から大業元年（六〇五）の間に成立したと考えられている。（佐藤哲英『続天台大師の研究』第三篇「天台智顗をめぐる諸問題」第三章「観心論疏にみる止観の原初形態」（百華苑、昭和五六年、三五七～三七九頁）を参照）
㊹佐藤哲英『天台大師の研究』第一篇「天台智顗の生涯と著作」第二章「智顗の生涯と時代区画」（二四～二七頁）を参照
㊺佐藤哲英『天台大師の研究』第二篇「前期時代著作の研究」第八章「小止観」（二四一～二六五頁）を参照

キーワード　智顗、潅頂、『法華玄義』、『四教義』、行妙